

王は篡奪者になりかねない。この矛盾を解消すべく、孟子は歴史認識の根本的な転換を主張する。まずは周王朝が厲王・幽王の時点ですでに滅びていたものとする。ついで孔子を堯舜禹・湯・文王武王周公に比擬する。孔子の登場は夏殷周三王朝の開始に匹敵する歴史の画期とされ、『春秋』は新王朝の綱領とされる。こうして厲王追放ないし幽王敗滅から孔子までが一つの時代として定立される。孔子の『春秋』がこの時代を記述し、記述の中心は「齊桓・晋文」にはじまる「五霸」である。齊桓公および晋文公以降の歴代晋侯、魏文侯・武侯・恵王、秦献公・孝公・恵文王など春秋期以来の覇者ないし実質的な覇権を担った諸侯は、周王朝の認証を受けていた。ところが、孟子は、周王朝をすでに滅びていたものとし、従って覇者を認証することもありえない。覇者は他国を圧倒する實力をもちさえすればよいのである。こうして春秋期の覇権は齊・晋・秦・楚・越の「五霸」の間を移動したものとされ、さらに『春秋』による時代区分によって、それ以降の覇者の存在は抹消されることになった。

『春秋』の編年の記述の下限あたりに春

秋・戦国の画期を求めることは、現実の歴史の推移を理解する上で必ずしも有効ではない。全中国的政治秩序については、前二五五年の秦恵文王称王まではむしろ春秋時代に連続する局面を無視できない。秦漢専制国家形成の時代としての戦国時代の開始は、前四世紀末の孟子のころに降るものと考えらる。

二〇一八年度史学研究会大会・総会の記録

二〇一八年度史学研究会大会・総会は、一月二日（金）午後一時より、京都大学国際科学イノベーション棟五階シンポジウムホールにおいて開催された。

総会では、田中和子理事長による挨拶の後、北村昌史氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告・審議がなされた。

庶務（金澤潤作常務理事）からは、役員交代および会員数の動向についての報告の後、四月二〇日（土）午後一時より京大文学部第三講義室を会場として行う来年度の例会のテーマを「病」とすることが報告された。

編集（中砂明徳常務理事）からは、『史

林』の刊行状況についての説明があった。会計（谷川穰常務理事）からは、二〇一七年度決算および二〇一八年度予算について説明があった。

広報（下垣仁志常務理事）からは、例会・大会のためのポスター作成と、ホームページの管理について報告があった。以上の報告はすべて原案通り承認された。大会では、次の二本の講演が行われた。

井野瀬久美恵氏

「帝国だったイギリスの過去」と向き合う——一九八八〜二〇一八、激変する研究動向と環境のなかで——」

吉本道雅氏

「前四世紀中国における歴史認識の変容——時代区分としての「春秋時代」の出現——」

講演者紹介と司会は、それぞれ小山哲事と中砂明徳常務理事がとめた。講演内容は本号に掲載されているので参照されたい。

公開講演ののち、高嶋航理事が閉会の辞を述べて会を終了した。

（文責 中砂明徳）